

南辺の村です。それは、江戸時代の末のこと、十一月のはじめ、ある日の夕方でした。
紀州や阿波の広村では、秋の取り入れが終り、田んばには、いくつものいなむらが、ならんでいました。
「米がたくさん取れたし、いいわらも残ったし、ありがたい、ありがたい。」
村人たちちは、こういって、喜びました。
かり取つたあとの、いねのわらは、大切な使い道があつて、たばにして、高く積み上げておきます。これが、「いなむら」です。
そして、村人たちとは、そろそろ、冬の準備にとりかかっていました。

十一月の後二日
財團の十二月
五日、現在の
十二月三十日
間である。



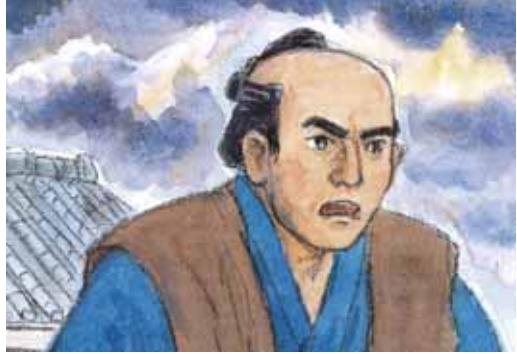
■西・橋本昌也(あさもとまさや)
1950年、高知市に生まれる。専修大学文学部卒業。
日本初の学生作家として、日本文壇の新星として注目される。

『おお、地震だー。大地震だー。』
『あやー。』
『こわいよー。』

『でも、親にしがみつきました。』
『やあ、親。』

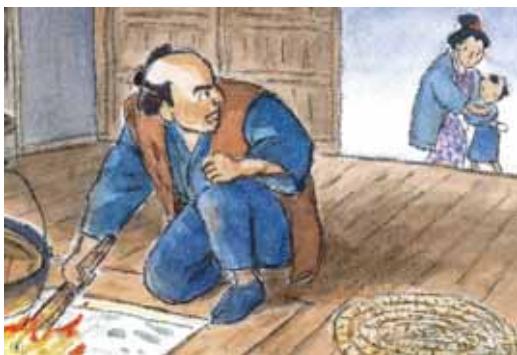
かべがくずれ、かたひいた家が、
けむりのように、はりがまう上がりました。

卷之三



庄村をおさめる庄屋として、村人にしたがいでいる済口儀兵衛も、家族といつしょに家の外に出ました。
「わが家は、だいじょうぶだが。
『村人たちは、無事だらうか……。』
空には、黒い雲と白い雲とが、あやしく入りまじって広がり、遙くの雲を切りくさるように、するどい先が走りました。
しかも、その遠い海のむこうから、
『はるか』『はるか』『はるか』
大鳥がとんとんくよなうな音が、聞こえてきたのでした。
『これは、おそろしいことになる……。』
『三分の一ゆく』
儀兵衛は家族に、
『いますぐ、丘の上、一本松から
庄兵衛社のほうへ、ひなんしなさい。』
『残りを全部生きながら』
と命じて、自分は家の中心に入りました。

四庫全書



「津波だ。」「敵兵衛は、たいまつに火をつけながらもなく、津波がおしよせてくる村じゅうに、危険を知らせて歩く間はない。田んぼのいなむらに、火をつけて合図するのだ。」

四九



儀兵衛は、走りました。
いなむらのひとうに、火をつけます。
よくかわいでいるいなむらは、ぱっと
燃え上りました。

一本分ぬく
次から次へ、次の田んぼへ。
儀兵衛は、走って走って……。

みんな、早く集まつてこいよ。
そして、止へひなんするのだ』

—全農園くー



『庄屋さまの所が、火事だぞ。』
『庄屋さまに、何があつたら大変だ。』
『それ、火をけしにいけ。』
村人たちが、すぐさま、集まつてきました。
こんな時には、村じゅうひとり残らず、
火けしに、加わることになっていたのです。

『庄屋さまあ。』
『庄屋さまあ。』

まつ先にやつてきた若者たちが、火を
けそうとすると、儀兵衛がおしとどめました。
『津波だ！ いなむらの火をけすな！』
『庄屋さま！ どうしてですか。』
『津波だ。津波がくる。』
村のみんなが、集まつてきたかどうか、
たしかめるのだ。
そして、一本松から、
広八幡神社のはうべ、
みんなをひなんさせるのだ。』

『はい、庄屋さま。』
『少しうきながらー』
こうして村人たちが、高い所に
ひなんした時、
『あれを見る！』

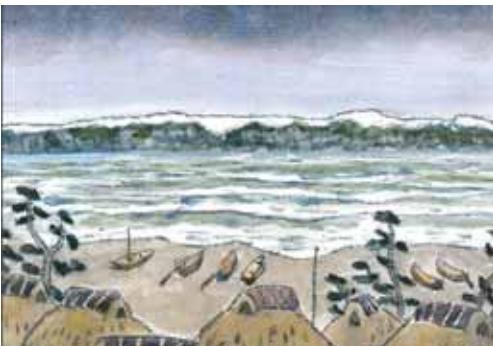
儀兵衛が、海のむこうを指さしました。
『なんだろう！』
村たちは、おそろしいものを見ました。
まさに、暗くなりかけた沖の海に、
長く黒い帯が広がり、
こちらに、ぐんぐんせまつてあります。

『津波だ！』
『津波がくる！』
『ぬきながらー』
『ううおーん』



長い帶が、海のむこうを指さしました。
『なんだろう！』
村たちは、おそろしいものを見ました。
まさに、暗くなりかけた沖の海に、
長く黒い帯が広がり、
こちらに、ぐんぐんせまつてあります。

『津波だ！』
『津波がくる！』
『ぬきながらー』
『ううおーん』



長い帶が、海のむこうを指さしました。
『なんだろう！』
村たちは、おそろしいものを見ました。
まさに、暗くなりかけた沖の海に、
長く黒い帯が広がり、
こちらに、ぐんぐんせまつてあります。

『津波だ！』
『津波がくる！』
『ぬきながらー』
『ううおーん』

		<p>人々は、思わず身ぶるいました。 海辺の村が、水けむりとともに、津波に おそれたのです。</p> <p>村のすべてのものが、さかまく波に のみこまれ、すがたを失っていました。</p> <p>(少しおき)</p> <p>つい先ほどまで、津波がくることを 知らずに、あそことにいたのだと、村人たちには 気づきました。</p> <p>「おう、おそろしいことだ!」 時をおいて、津波は二度、三度と、 おそうできました。</p> <p>一ぬく</p>
		<p>村人たちは、すらりと、儀兵衛の前に ひざまずいて、頭を下げました。</p> <p>「おかげさまで、命が助かりました。」</p> <p>「庄屋さま、ありがとうございます。」</p> <p>儀兵衛は、うなずきながら、いいました。</p> <p>「浜口の家には、 大地震のあとには、津波がくる という、いい伝えがあつてな。 どうさに、それを思い起した。</p> <p>『さあ、これを食べて元気を出しなさい。』</p> <p>儀兵衛が、先頭に立つて、みんなに配つて にぎり飯をつくりました。</p> <p>「さあ、これを食べて元気を出しなさい。」</p> <p>こう先祖さまの、言葉のおかげだ。』</p> <p>一ぬく</p>
		<p>儀兵衛は、若者たちを引きつれて、 となりの村へいき、たくわえ米を 借りてきました。</p> <p>そして、おかみさんたちが、米をたき、 にぎり飯をつくりました。</p> <p>「さあ、これを食べて元気を出しなさい。」</p> <p>儀兵衛が、先頭に立つて、みんなに配つて にぎり飯をつくりました。</p> <p>「さあ、これを食べて元気を出しなさい。」</p> <p>ふみだしたのです。</p> <p>ところが、津波によって、何もかも 失つてしまつたある村人は、儀兵衛に、 『もう、広村には、住んでいらされません。』</p> <p>働き口をさがしに、よその村へ うつろうと思います。』</p> <p>また、ある村人は、 『またいか、津波がくるかもしれないと思つて、こわくてなりません。』</p> <p>もっと、安全な所へいきます。』</p> <p>と、なみだながらに、うつたえました。</p> <p>一ぬく</p>
		<p>やがて、余震が続くなか、 あれはてた村に、いくつもの仮小屋が、 つくられました。</p> <p>村人たちが、立ち直りの一步を ふみだしたのです。</p> <p>ところが、津波によって、何もかも 失つてしまつたある村人は、儀兵衛に、 『もう、広村には、住んでいらされません。』</p> <p>働き口をさがしに、よその村へ うつろうと思います。』</p> <p>また、ある村人は、 『またいか、津波がくるかもしれないと思つて、こわくてなりません。』</p> <p>もっと、安全な所へいきます。』</p> <p>と、なみだながらに、うつたえました。</p> <p>一ぬく</p>



儀兵衛は、浜辺によせる波を見つめました。
「天瀬(あませ)浪と、美しく名づけられたこの浜辺。」
「ここに、津波をふせぐ堤防をつくろう。」
「村人に働いてもらえば、それが働き口になる。」
「ふるさとがよみがえるのだ。」
「儀兵衛は、ひとり、うなぎました。」
「浜口家では、むかしから、鏡子でしょうゆをつくり、江戸で大きな商売をしています。」



さっそく、工事が始まりました。
儀兵衛が調べたところ、広村は、ここ五百年の間に、ほぼ百年ごとに、大津波におそれていることが、わかりました。
「工事のさし手をしました。」
「村人たちは、よく働きました。」
「一村を守るために、がんばろう。」
「男も女も、働けば、すぐにお金がもらえる。」
「ありがたい、ありがたい。」
「田畠の仕事が、いそがしくなれば、工事のほうは、休みになるとか。」



四年の月日、多くの人々の力、それに大金をかけて、りっぱな堤防が完成しました。
(少しの間)
「いなむらの火が燃えた時の、安政南海地震(安政南海地震)津波から九十二年後、昭和南海地震(昭和南海地震)の時には、予想したように、大きな津波がおそってきました。しかし、堤防はゆるぐことなく、人々を津波から守りました。」



和歌山県(和歌山県)広川町(広川町)の堤防では、毎年十一月に、津波まつりがおこなわれます。
「堤防づくり、ありがとうございます。」
「こどもたちがそれぞれに、一ふくろずつの土を堤防に運び、積み上げていのります。そして、」
「みんなで、ふるさとを守ります。」
「みんなで、防火の心をあらたにするのです。」

はまほま